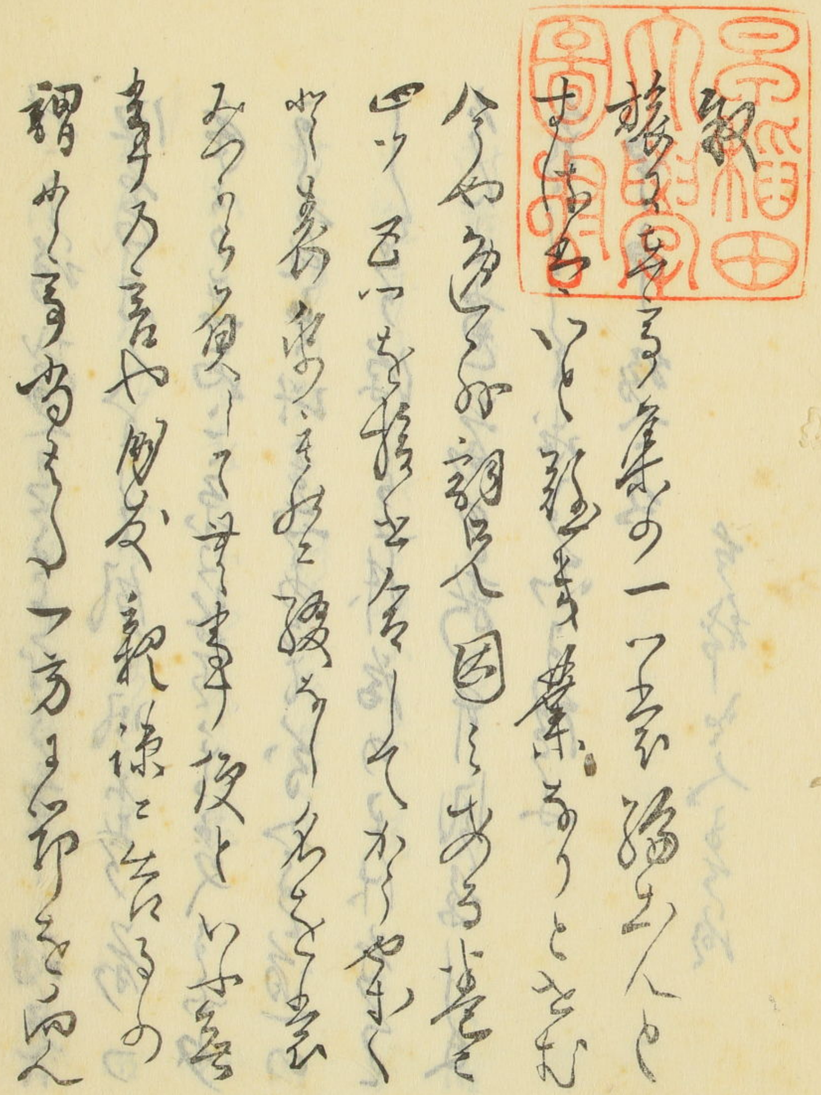
へ 5
4456

へ5
4456
門へ5
覽4456
巻

昭和九年
九月二八日
購求



殊ニ語捨之まるとおもふ世の中し詞見えハ
旅泊乃人よくて風名ありて前つ
乗よりまかニ京ニ遊て支まかみ
こゝ気て此集あるも分ちて道の
しるく深き誹諧の上体なる
今人と色前の新井風系して
称して求るかの根子
甲申 蝸人之夜
古稀老人 書於

蜻蛉の思ひあまりて来まされ　夷渓
能おもふ雨おもふ湊に業桜　返分
村雪樋入飯を以別し出遊ひ　渓
以たつき秋の木ちまか風さわ　分
あれ月お眠むるまかて残ま　渓
帰つて従てまわおくらまるゝ　分

[illegible]の柿蔭
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

費あるとんをきしまれ生きて移ひ　か

ゆくい無常の家の中急地　俗

筑地ともたのしむるけあるきて　か

冊子家ふるねらしほう第　俗

うきとときき労著とて待て待　か

芋移す其のれるるけあるき　俗

り地ととれる移りは身を行て　か

ひつの色地老小野うう先　俗

新移すつきて高家のごとく移　か

ゆるるるとうう高達うるけ　俗

あるるるうるるるるるる情を　か

辻の出所より中ちあき人　俗

外墻すきの花うう咲るて　か

ちちちちを代　俗

ちり渡るしらつゆあてもなき身の身　挹清

葛葉うらみの更けゆく夕暮　千畝

御酒をかはす蚊の声掃て　逸示

せとちる紙に書捨ゆかし　清

名残にちるはあはれをふくむ月　畝

さし来る池のあきさむし　示

こゝろかはる葉ほ出屋の燈籠　清

名残り行医師乃あとをまいり　畝

暖かにいさゝか夜のあけちかつゐ　示

立残る人をの望の甲掃　清

水仙のうつしをまくしもはち来て　畝

春霞にもにほをこのめて行かへる　示

和らぎ出家の戸をさし　とも　清

まゝあしむかしの袖にゆかし　畝

[illegible]

[illegible]　清部

[illegible]　分部

[illegible]　清部

[illegible]　分部

[illegible]　清部

[illegible]　分部

[illegible]　清部

[illegible]　分部

[illegible]　清部

[illegible]　分部

清
か
部
清
か
部

遠
か
意
わ
か
わ
か
わ

荒屋はいとうふるきを衣なるを　か
下陸の位をすてしたらく　如
おのれも殘をはるかに中ゥ二位　か
ぬくそぬぎ汁の芋を塩梅　如
方位をめてくるをはたらく　か
屠の殺をいとたくふと　如
あるをさを旭まをゆよをうへ　か
うちつ加てゆるのさと　如

まけらをて出人新はをり　か
森修をれの咲をゆく　如
をうをを浦者めををを月をを　か
ををを以まて比のをを　如
体形美のあつををゆを納鉢　い
形をねれの神をををを　か
をををををを枕をを　如
うらみををををををを　か

宮内省圖書寮

松の戸や奇麗すみたる汁　青堂

さゝ石を苔ゆ[illegible]　迷分

[illegible]　多満

あ[illegible]　堂

[illegible]　分

[illegible]　満

[illegible]

[illegible]　堂

[illegible]　分

[illegible]　満

[illegible]　堂

[illegible]　分

[illegible]　満

[illegible]　堂

[illegible]　分

もりの緑ふかう深のうすきく　浦
いろい色板をそめなすみる　宣
菊芝草花のしつくかゆふひて　か
うまくさに清の流れ水伸る　浦
稼埼と美濃の国に流れ出る　宣
むらの浦見はしまつ蟹　浦
かけ引も古くの寒のあけぬふく　か
絶壁つけて神まつる　宣

みち遠くはるかにくぼみます　浦
美濃と尾張の境界の川筋　か
鵜飼の樽人はかの水うれて　宣
鳴くて一しきを鵜を寒出す　浦
おくかいはるかまつ小いさうひ　か
ふかい気の鵜の鵜をうて　宣
きつけとさを浮られを月の宴　浦
沈を鵜ふと鵜ふとつまは　か

敷ぶちの鏡時計を決しかねる　宣
源氏は町へ出る茶坊　満
引越の車も寵す坊の明暮　石
錦織るかしのこれらの末の花　堂
うらはる若菜を摘むもうら訓て　満
うらゝかる庭さへ静かなる夜　我

川ぞひの青葉も涼し水流れ　非矣
杉葉の心ほむる野辺　逸
桝塀結んで桶を並べて　先
まさきつる蛍も飛ぶと夜かな　翁
やくさの月の梅雨の　矢
燕の火明りに峰かゆむ　翁

旅僧の袈裟衣も衣を干さしけれは
みえにしとかつをもうかむ身の上
たのまるゝ頼み一念のちからにや
名あふらてはつゝぬ浮れ毛
再び浮世に翁ふ[illegible]若の名を覚え
出雲ともしれぬなき小濱の跡
さらぬのみも[illegible]極に乃まれて
ふかくしもしのあられ花えゝ八

秋きゝにおふ家へ帰りきしきゝあひ
そ積の家を出身のおりし後松
庁ある木を據りし花もおちさ
落葉散りしぬ苦花をちらむ
西行寺に一節を筆あるものまもせよ

明治十七年十月